
BUMP OF CHICKEN メドレー

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B U M P O F C H I C K E N メドレー

【Nコード】

N 9 7 4 3 A

【作者名】

滾

【あらすじ】

主人公とその彼女の話。それ以上も以下もないって話です。

一話目 キャッチボール(前書き)

BUMP OF CHICKEN というバンドの曲をそのまま小説にしたお話です。

一話目 キャッチボール

とある並木道。

そのよこにある公園に、僕と彼女は居た。

そこそこ広い公園だが、太陽が山に身を隠し始めるこの時間帯になると、人通りも少なくなり始める。

山に隠れはじめた太陽が、程よく世界を茜色に染めている。

そろそろ外気が肌を刺す季節。少し寒い。

僕は白い息を吐き出しながら、

「よし。ホイ、これ。上手く投げろよ?」

彼女の手にごムのボールを握らせると、彼女に背をむけて距離を置いた。

つい先日から付き合い始めた僕等。今日はこの公園に、キャッチボールをやりに来ていた。

さつきも話したように、この時間帯は人の通りが少なくなる。だから、こういう事をして遊ぶのには最適だった。

唯一難点を挙げるとしたら、隣の大通りから車の排気ガスが風の流れて漂ってくる位だろうか。

「ケホケホ・・・ッ」

少し彼女が咳をした。

多分排気ガスの所為じゃなかった。

慌てて僕は彼女に歩み寄って、

「止めとくか?体に障るだろ?」と言った。
けど彼女は、

「ううん」首を振って、

「大丈夫だよ。ありがとう」

と、苦しさを隠すように僕に笑いかけた。

「そっか」

そんな彼女に背を向けて、再び彼女と距離を置

「え？」

こうとして、

視界の上の方。さつき彼女に手渡した白いゴムボールが、何か凄いスピードで飛んでいくのが見えた。

「ほらぁ！走れえ！」

彼女が後ろで口元に手を当てて叫んでいるのを見て、彼女が全力で投げたのだと理解する。

「捕れるわけ無いだろ!？」

僕は叫びながらダッシュして、飛んでいくボールを追った。

ジャンプして何とかとろうとしたが、さすがに間に合わない。

「いいよ！無理して捕らなくて！」

遠くで彼女が言った。投げたのは彼女だが。

落下して、コロコロ転がりながら、徐々に力尽きて止まるのを止めようとするボール。

それを見て、少し悲しくなる。

彼女が無理をして投げたボール。それが何か、心に刺さった。

弱い彼女が強く投げたボールは、“ソレ”を隠すためなんじゃないか、と、少し思っ、悲しくなった。

さて。

日が沈んだ。

ボールは、何回僕と彼女の間を往復しただろうか？

僕等は公園のライトを利用して、まだキャッチボールを続けていた。と、いうより、

止めるタイミングが見つからなかった。

ほら、よく、始めたはいいけどこっちから止めるって言い出すのはなあゝ・・・、みたいな状況ってあるじゃん？

アレ。

特に今回はこっちから言い出しただけに、「もう止めよう」「は言い出しにくかった。

何かよく見ると、彼女はあからさまに「飽きたんだけど？」な顔を
している。

もう止めたほうがいいか？

これ以上は、彼女の体に障るんじゃないだろうか……？

僕は考えながら、最後のつもりでボールを投げた。

と、彼女はそれを両手でキャッチして、

「……………」

ボールを凝視するようにして固まった。

「！」

苦しいのか！？

僕は駆け寄ろうと足に力を込めた。が、

「えへへ……」

「？」

彼女は不適な笑みを浮かべた後、ボールを握りなおした。

そして、

ぐわ、とプロ野球選手よろしく、大仰に振りかぶってボールを、

「えいつ！」

投げた。

「え！？」

投げられたのはコントロール全く無視の“見よう見まねカーブ”。

それなりのスピードが出ているボールに、

「だから、捕れる訳無いだろ、ってッ！」

叫びながら、飛びつくように手を伸ばした。

バシッ

いい音がしたな、と思った。

「お」

見ると、見事、手の中にボールが収まっていた。彼女も驚いていたが、もっと驚いたのは僕の方。

「捕れないと思っただよ」

驚いたように、遠くから彼女は笑って言った。

彼女は優しい。

とても優しい。

それでも、と、僕は思う。

まるで魔球。消える魔球のような、いつ消えてしまっか解らない、そんな優しさだった。

彼女のボールはいつも、届かない所で飛んでいく。

なんかここまできると、「ワザと？」と聞きたくなってくる。が、それでもいい。

ワザとでも、悪気無しでも、そっちでもいい。

僕は彼女の投げるボールを取る。

僕は彼女と一緒に居る。

それでいい。

彼女は僕に向かって何度も、ボールを投げた。

だから、僕も彼女に向かってボールを投げる。

捕れるわけの無いボールも、必死になって追う。

「捕れなくてもいい」と、微笑んで欲しくなかった。

今まで見逃した優しさや、愚痴や色々必死で追う。

“キャッチボール”は続いていく。
まだ、まだ、これからも続いていく。

彼女が上手くなって距離をおく。
だけどその分心は近づいていく。

君の声は遠くなって、
君のコエは近くなる。

カーブのような曲がった愚痴。

消える魔球のような、一時の、ほんの一時の優しさ……。

キャッチボールは続いていく。

これからも続いていく。

そう思ってる。

そう思っていたかった……。

一話目 キャッチボール（後書き）

全五話です。多分三日ぐらいで全部終わります。
ともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

二話目 スノースマイル 前

ああ……。寒い……。

外気の、肌を突き刺すような冷たさに、僕は肩を寄せる。

雲に少し覆われつつある空で、太陽が弱々しく僕等に向けて陽を放っている。

季節は冬。

今年は近年稀に見る寒さを記録し、いつもよりも雪の量は凄かった。が、残念ながら朝方でそれも止み、おかげで僕等はこうして外に散歩することが叶ってるわけだ。

確か去年の今頃は、特にすることも無く家でゴロゴロしていた。

全く持って、青春の一文字すらも感じることに出来ない日々を過ごしていた。

だけど……。と、僕は笑った。と言うより勝手に顔が綻んだ。

今年は、去年とは明らかに違っている。

僕は横を見た。

「ん？」

小首を傾げて、「何？」と彼女は僕を見上げた。

そう、去年の冬と、今年の冬との変化。それは、この彼女の存在。

「どうしたの？」

僕が黙ってじーっと見ていたからだろう。彼女は少し怪訝そうな顔をした。

「いや、なんでもないよ」

ふん、と、彼女は前に向き直って、

トトト……

と、僕より数歩前に小走りで駆けた。

よくある並木道。積もった雪。

横を見れば、キャッチボールをした公園が見えた。
最近、僕等はキャッチボールをしなくなっていた。
否、出来なくなつた、と言つた方が妥当か。
あの秋より、少し、少しだけ、
彼女は痩せた。

人通りは少ない。

何と言つても、まだ夜が明けて間もない。
更に言えばこんな雪が積もつた中、好き好んで歩く物好きもいない
だろう。

まあ、僕の前を歩いているのが、その物好きに違いないのだが。

「あゝあ．．．」

と、彼女は空を見上げた。

そしてポツリと、

「雪、降ればいいのに．．．」そんな事を呟く。

彼女はボフ．．．と、子どものように雪と一緒に落ち葉を蹴つ飛
ばしながら歩く。

「そんな思い通りには行かないだろ」

「そんな事ないよ。昨日の雪だつて、私が降れえ！つて言つたから
降つたんだよ？」

そんな冗談を言いながら、ボフ．．．と雪と一緒に落ち葉を蹴
つ飛ばしながら歩いていく。

ボフ．．．、ボフ．．．、ボフ．．．

「またさつきみたいに転ぶぞ？」

僕は言った。

さつき、彼女は今みたいに雪を蹴っていて、雪の下に落ちていた落
ち葉を蹴つ飛ばして滑つて転んだ。

「痛たたた．．．」と僕を見る彼女を、僕は手を引いて起した。

少し彼女は止まった後、

「ちえ．．．」

トトト・・・、と、口を尖らせながら僕の方へ戻ってきた。
一つ一つの行動が、いちいち可愛い。愛しい。

その顔は少しすねてる様な、そんな感じだった。

「なんで怒ってんの？」

と、僕は言った。

「ふ〜んだ」

へへへ、と、彼女は笑った。

怒ってるんだか、喜んでるんだか・・・。

「寒いな」と僕。

「寒いね」と彼女

「手、冷たくない？」

「そんなこと無いですよ？」

「何で敬語さ？」

「へへへ」

「冷たいでしょ？」

「冷たくないよ？」

「嘘だあ」

「嘘じゃないよ？」

「本当？」

「本当」

・・・。

「握らせてください」

僕は言った。

「はいはい。いいですよ？」

にっこり笑って、彼女は手を差し出した。

本当は彼女の方から「寒いよ、手繋ご？」と言ってくるのを待つ

ていたが、彼女の方が一枚上手だった。

握った彼女の手は、やっぱり冷たかった。

が、多分僕の手は多分暖かった。

このために、さっきからずっとポケットに手を通っ込んでおいたか

らだ。

「わ、暖かいね」

僕を見上げて、彼女は驚いたような顔をした。

俺は常に暖かいさ。けど手が暖かい人って心は冷たいって言うよ？
え、そうなの？

そんな会話をしながら、僕等は歩いた。

会話しながら、僕は前を見る。

まだ綺麗なままの、まるで絨毯のように敷き詰まった雪。
誰の足跡もついていない、綺麗な白の絨毯。

そこに、二人で足跡をつけて歩く。

僕等がここを歩いた証。

二人で生きた証。

多分明日にでもなれば消えてしまっただろう、儂い証。

僕には夢があった。

本当に些細で、それでも本当に叶えたい夢。

そんな夢を、彼女はまだ知らない。

そんな夢は、まだ言わなくても良かった。

今、彼女が僕の隣にいる。

今、彼女が僕の隣で笑ってる。

それで、十分だった。

二話目 スノースマイル 前（後書き）

どうやら六話の構成になりそうです。

文化祭やらなんやらで遅くなるかもしれませんが、呼んで楽しんで頂ければ幸いです。

三話目 スノースマイル 後

ところで、

僕等二人で歩くのには少しコツが要る。

僕の身長が180ちよい。彼女の身長が150前後。と、単純計算で30cm位の差がある。となると、自然に彼女と僕では歩幅に差が生じてくることになる。

だから、僕が何も考えることなく歩いていると、

「は〜や〜い〜よ〜っ!」

こうなる。

「あ、ごめん」

振り返ると、彼女は僕のポケットに手を入れたまま、半分引きずられるような状態になっていた。

僕は止まって、彼女が隣に並ぶのを待つ。

「も〜・・・」

彼女は頬を膨らませて、僕のポケットから手を抜いた。かと思うと、僕の横を抜けて小走りで駆けた。

そしてクルリ、とコツチに振り返り、

「べ〜、だ!」

可愛らしく下を出して、滑らないように恐る恐る、といった感じでまた小さく駆けていく。

そして何を思ったか突然停止して、その場にしゃがみこんでしまった。

一瞬ドキッ、としたが、次の瞬間彼女は立ち上がって僕の方へ振り返った。

手には、雪玉。

そして、

「えい！」

彼女は振りかぶって、僕に向かって雪玉を投げつけた。その球は思ったよりも早く、僕はよけることが出来ずに見事に顔面で雪玉を受け止めた。

ずるり、と僕の顔から地面に落ち行く雪玉を見、彼女は大きな口を開けて笑った。あはははは。

こんなところでキャッチボールの成果を出されてもな……。と、笑いながら、

「こんにゃろ」

僕は彼女を追って走った。

「きゃあ」

彼女も走る。

それを、僕は追った。

二人でまだ足跡のついていない雪の中を走る。

この空間に、二人分の足音が響く。

彼女は度々振り返って、そのたびに僕は彼女の笑顔を見た。

彼女が走っているのを追いかけて、思う。

ああ、と。

覚えておこう。と。

この景色。

この並木道。綺麗な白い雪。そして、その上で元気に駆けている、彼女の事を。

彼女が見ている景色。

そして僕自身がここで彼女と一緒に、確かに“居た”という事実を、覚えておこう。

そう思う。

空は乾いている。

雪が積もっている。

僕は彼女を捕まえた。

「へへ、つかまった」

僕を見上げて、彼女はそう子どものように微笑んだ。
少し息が荒い。

今この瞬間が、夢の代わりになる。

そう思う。

僕も、自然に笑顔だった。

彼女がいつも笑顔をくれる。

そんなことは解ってる。

解ってるから、

別れが辛いんだ・・・。

三話目 スノースマイル 後（後書き）

何か最近身の回りでお亡くなりになる人が多いです。

つい先日も同じ学校の一つ後輩が事故で帰らぬ人となりました。
この場を借りていいのか解りませんが、ご冥福をお祈りします。

四話目 車輪の唄前

「はぁ・・・ふう・・・」

僕は精一杯自転車を漕ぐ。

ギー・・・ギー・・・ギー・・・

自転車の車輪が悲鳴を上げている。

今にも壊れそうな音を聞きながら、僕は恐々ペダルを踏んだ。

ギー・・・ギー・・・ギー・・・

ああ、音がヤバイ。

いつにも増して、ヤバイ。

けどそれも仕方ないか、とペダルを踏みしめながら節に思う。

いつもは一人で乗っているのに、今日は僕一人で乗っているわけじやなかった。

僕の後ろ。

荷台に、彼女を乗せていた。

彼女は荷台に横を向いて座って、落ちないようにしっかりと僕の背中を掴んでいた。

明け方の寒い外を、彼女の温もりだけを感じて走っている。

冷たい風に目を細めながら、未だ出ぬ太陽を待ちわびる。

以前に乗せたときより若干軽くなった彼女を振り返って、

「大丈夫か？寒くないか？」と聞いた。

「大丈夫だよ」

少し小さい声で、彼女が答えた。

「そっか」

確かな彼女の温もりを背に、町を走る。

町はまだ人通りが少なく、静か“過ぎる”ってぐらい静かだった。だから、

「・・・世界中で二人だけみたいだな」

そんな事を言ってみた。

「・・・ハハ」小さな笑い声。

はい、ゴメンナサイ。

自分でも「どうかな」と思ったよ。

彼女が“引越す”事は前から聞いていた事だった。

親さんはもう引越し先に行っていて、彼女だけが家でやりたいことがある、と一日だけ一人でこっちに居た。

だから僕が彼女を駅まで送ることに成ったわけだから、彼氏だから、まあ当然の事だろう。

だけど、どうなのだろう、と思う。

僕はこのまま彼氏ではられない。

それを解った上で、僕は笑顔で彼女を見送れるだろうか？

そんな事を考えて、僕はペダルを漕ぐ足に力を込めた。

加速して、前に立ちはだかる困難を見据える。

線路沿いの坂。

これを上りきればもう駅だ。が、この坂がかなりのクセモノ。急で、自転車で登ろうと思うとそれなりの筋肉痛を覚悟しなければならぬ。

しかも二人で、となると、それはもはや拷問の域。

かと言って、降りて手で押していくのは、男として駄目だ。

「ヨっし・・・ッ！」

小さく気合を入れて、僕は坂に挑む。

キツイ。

上り始めて2秒でそう思った。ああ、もしかしたら1秒かも。

徐々にスピードは落ちていく。いつもとは比べ物にならない荷重が、足に掛かっている。

「ぐお〜・・・ッ!」

思わず喉から声が漏れる。

情けない。こんな事なら、筋トレをしておくんだった。

「ほ〜ら!頑張れ!もうちよつとだぞ!」

後ろで彼女がそんな事を言う。

何故だろう、とても楽しそうな声。

ただど少し、辛そうな声。

ギー・・・ギー・・・ギギツ・・・ガゴガガ・・・

音がありえない感じになってきた。「ガゴガガ」なんて聞いたことない。

今にもタイヤがガチョツ、て外れてしまいそうな音だ。

頼むから、耐えてくれよ?

タイヤに向けて思う。

あー・・・、どうだろう。タイヤに向けて、では無いかもしれないなかつた。

ともかく、もう僕の漕ぐ自転車は坂を制覇するまでもう少しだった。

漕いで、

漕いで、

漕いで、

登り、きつ・・・た。

ふう、と、息をつこうとして、

「ッ

僕は言葉を失った。

坂を上っているときには、影になって気付かなかった。
太陽が出ていたのだ。

朝焼けが、僕等を照らした。

「わぁ……」

彼女が後ろで言った。

「綺麗だね……」と。

綺麗だった。多分今まで見た朝焼けのどれよりも。

だけど、僕は「綺麗だね」と答えることも「うん」と頷くことも出来なかった。

今何かを言おうとすれば多分、声が裏返るだろう。

僕は泣いていた。

朝焼けが綺麗だから、とか、そんなロマンチックな理由とかじゃなく、

ホラ、解るだろう……？

券売機で、切符を買う彼女の後ろに並んだ。

別に他の券売機は空いていたのだが、彼女の後ろに並んだ。

別に彼女は何も言わなかった。

彼女が買ったのは一番高い切符で、それを使って行く場所を、僕はよく知らない。

よくテレビで見たり聞いたりはするけど、行ったことなんて無い。

僕等が住んでいるところより都会だ、と言うことだけは、多分誰でも知っていた。

そしてそこで彼女が元気になる確率が低い事も、知っていた。

僕達は今日で別れる事になる。

その話を切り出したのは彼女の方だった。

ごめんね、と言っていた。
もう私は駄目だから。と。
連絡も取れなくなる。

つまりは、携帯電話もろくに使えなくなる、と言ったことだった。
悲しませたくない、と彼女は泣いた。

ここで拒めば、彼女が更に悲しむだろう。と、僕はその申し出を受
けた。

僕は買った入場券を、スグに使うにも関わらず、ポケットにしまっ
た。

大事に。大事に。

改札を抜けようと彼女が先に行く。

僕はその後ろにつくように歩いた。

彼女が持っている大きな鞆は、一昨日一緒に買いに行ったものだっ
た。

あれが最後のデートになった。

大きいから、「持とうか？」と言ったけど、「大丈夫だよ。ありが
とう」と言つて笑った。

大丈夫じゃないのは解っていたけど、僕は「そうか」と言った。
彼女が改札に切符を入れる。そして進んで、

「あ」

鞆が引つかかった。

紐が改札に引つかかっていた。

彼女が僕を見た。困ったように。

僕は何も言わず、頑なに外れようとしないう紐を、手で解いた。
本当は、解きたくなかった。

解いたら、彼女は行ってしまつから。

いや、意地悪とかじゃなくてさ、

ホラ、解るだろう・・・？

五話目 車輪の唄 後

ジリリリリリリリリリリ・・・

電車が来るのを知らせるベルが鳴った。

待ったワケでもなく、改札口を抜けてすぐの事だった。時間ぴった
り。

向こうの方から電車がこっちに迫ってくるのが見える。

あの電車に、彼女は乗っていく・・・遠くに。

体の中から何かがこみ上げてくるのを感じた。

それをぐっ、と堪えて、電車を見る。

電車は徐々に速度を落として、止まる。

音を立てながら扉が開いて、

彼女だけが電車に乗った。

僕は乗ることの無い“そこ”に、彼女が乗った。

たったの一步だ。

僕も一步を踏み出せば横に並べる。

それでも、凡そ単純な一步とは比較にならない程の距離を置いた“
一步”だった。

彼女はクルリ、とこっちに振り返って、

「約束だよ？」

言った。

「必ず、いつの日かまた会おう？」と。

ただの引越しならば、そんな願いはスグにかなう。

下手をしたら、明日にでも。いや、なんならついていってもいい。

連絡も取れるだろう。

普通の引越しならば。

それが出来ないことを解った上で、彼女は笑顔でそう言った。

目を潤ませながら、それでもしつかりとそう言った彼女に、僕は何か言ってあげたかった。

一言、

「約束だ」とか、

「大丈夫だよ」とか、

そんな事を言っただけでよかったです。

カッコ良く、サラリと、そう言っただけでよかった。

なのに、答えられなかった。声が出てこなかった。

今度は泣いてたわけじゃなかった。だけど、泣きそうになっていたのは確かだった。

そして、今度泣いたら、駅中に響く声で泣いてしまっただろう事も確かだった。

だから僕は何も言わず、俯いたまま、カッコ悪く、手を振った。

彼女がどんな顔をしていたかは解らなかった。

笑ってはいなかっただろうと、それは解った。

そして顔を上げたときには、扉は閉まり、既に電車は動き出そうとしていた。

彼女は最後に、扉越しに口を二回動かした。

何て言っただか、僕には理解できた。

けど、それは教えない。

僕の心の中にとどめておきたいから。

ガタン・・・ガタン・・・ガタン・・・ガタン・・・

電車が走り出した。

僕は電車の動きに合わせて電車を追った。

彼女も電車の中で、電車の向かう方向に逆らっていた。

電車が遠ざかる。

追える限界が来た。

もう無理だ。

終えない。
佇む僕に、

いいのか？

心の中で、誰かが言った。

いや、僕だ。

僕の中で、僕が僕にそう聞いた。

いいのか？

もう一回、僕は考えた。

いいのか？

このまま、二度と会えない可能性もある。

いや、寧ろその可能性の方が

駄目だ！

僕の中で何かが弾けた。

次の瞬間には、僕は駆け出ししていた。

改札を飛ぶように抜けて、駅を出て、自転車で飛び乗った。

さっき登ってきた坂道を、自転車で今度は猛スピードで下る。

あまり速度の出ていないから、すぐに電車に並べた。

ギー　ギー　ギギー・・・　ギガ・・・ガ・・・

車輪が悲鳴を上げる。

耐える！

僕は転ばないように注意して、電車を方を見た。
彼女は僕に気付いているらしく、窓を開けて何かを言っていた。
顔は見えなかった。風で、目が開かなかった。

「
」

彼女は泣いていた。

いや、顔は見えないままだ。

何で解ったかって？

馬鹿にしちゃいけない。

僕はアイツの彼氏だ。解らないわけが無い。

声が、震えてた。

「約束だ！！！」

僕は手を上げて叫んだ。

電車はどんどん遠ざかっていく。

それでも構わず、僕は手を空に掲げて叫んだ。

「絶対！必ず！いつの日かまた会おうッ！」

彼女に聞こえたかは解らない。周りに人が居て、僕を怪訝そうな顔で見つめていたけど、そんな事は関係なかった。

僕は手を掲げた。叫んだ。大きく。遠くに向けて。

最後を、カッコイイ彼氏で見送ってやりたかった。

だから流れ出る涙は拭わずに、アイツに向かって手を振った。叫んだ。

また会おう。

絶対に、また会おう。と。

アイツに聞こえるように、見えるように、何度も、何度も。

大きく、大きく。

いつまでも、手を振っていた。

帰る途中、町が賑わい始めたのを感じた。

陽も出、通勤するサラリーマンや、これから開く店などが目に付く。

キー・・・キー・・・キー・・・

車輪の悲鳴が小さくなった。

それはそうだ。

今乗ってるのは、僕一人だから。

町は賑わい始めたのに、ちっとも心は晴れなかった。

「世界中に一人だけみたいだな・・・」

呟いてみても、今度は苦笑いすら起きなかった。

だから、「ハハ・・・」一人で笑ってみた。

キー・・・キー・・・キー・・・

車輪の音だけが心に響いた。

さっきまで後ろに座っていた彼女の微かな温もりだけが、悲しく、

残っていた。

六話目 銀河鉄道 ～乗客の話～

今まで住んでいた街に別れを告げる。なんて、ドラマみたな節を頭に浮かべつつ、実際はそんなことしない。

別れを告げるほど、この街に良い思い出は無かった。

ただ自分の席に座って、流れる景色をボーッと眺めていた。

おかしな話だ。

そう思う。

俺は止まったままなのに、実際は時速200kmで爆走しているのだ。

どっちだよ、と、冷めた声が漏れた。

こんな面白いこと、黙って自分だけで楽しむのはどうだろう？
皆に教えてやろう、と考えて、

ああ、そうか……。

俺の周りに、知り合いは一人も居なかった。

今日は引越しの日だった。

見送る奴は居なかった。

ただ一人で街をでて、こうして一人で電車に乗っている。

別に、見送って欲しかったわけでもなかった。

強がりとかじゃなくて、本当に。

ふと、通路をリボンを付けた可愛らしいクマが転がってきた。
いや、唯のぬいぐるみだけでも。

俺は迷ったけど、一応それを拾った。座ってるの通路側だし。
そうすると間も無く、幼い女の子が駆けてきた。

このクマはその子のなのだろう。俺がぬいぐるみを持っているのを

見て、

「何でアンタが持つてんだ!？」
みたいな顔をした。

拾ってやったんだろ。とか考えながら、別に何も言わずにぬいぐるみを差し出す。と、少女も何も言わずに、ひったくる様にしてぬいぐるみを持つていった。

・・・いや、まあいいんだけどな。

・・・。。。。

まあ、いいや。もう寝ようかな・・・。

夕べは荷造りやら何やらで寝るのが遅かった。

俺はシートを倒して寝ることに

「チツ！」

するかどうか迷った。

何故ならシートを倒したと同時に、後ろから漠然とした嫌味の象徴が聞こえてきたからだ。

いや、ただの舌打だけでも。

何だよ。このレバーはシートを倒すためにあるのと違うのか？

そんな事を考えだが、

まあ、いいや。そんなものは聞こえない振りに限る。

俺は目を閉じた。

「・・・。。。。」

「チツ」「二回目。

「・・・。。。。」

「チイツ」「三回目。

「・・・。。。。(寝れるか)」

俺は何も言わずに、黙ってシートを起した。

いいさ、別にシートを倒さなくても寝れる。

それに、別に寝なきゃいけないというわけでもない。

窓の外を見た。

さつき停まった駅から追いかけてきたのかどうかは知らないが、自転車が見えた。

坂道を下りながら、猛スピードで電車に並ぼうとしている。

いや、無理だろう。

自転車だろう？これ電車。

無理だろ。競輪選手でも無理だよ。ギネスだよ、追いついたらさ。

そればかりか、自転車に乗ってる男は電車に向かって大きく手を振って何かを叫んでいる。

何を言ってるか気になったが、さすがにそれを聞くほど俺も性根腐っちゃいない。

それでもなあ、と思う。

止めてやれよ。恥ずかしいだろ。この電車に乗ってる相手が。どんだけ見送りたいか知らないけどさ。

絶対、後々から後悔するんだ。

なんであんな事したんだろう・・・？って。

そんな冷めた事を考えながら、視線を外した。外して、

ああ、羨ましいのかもな。

と、心の中でそんな事を思う。

いや、そうなんだ。きつと。

羨ましいんだ。

俺は止まったままだから・・・。

何もやらないままで、何かしてる奴を笑う。

何様だ、俺は。

役にも立たないし、邪魔はするし……。
そんな事を考えていたら、何だか辛くなって俺は目を閉じた。
が、目を閉じたらまた何か考えちゃいそう、仕方無しに、目を開
けた。

え……？

真っ赤なキャンディーがあった。

目の前に。差し出されていた。

驚いたけど、何が何だか解らない内に、俺はそれを受け取っていた。
差し出していたのは、さっきぬいぐるみを捨てやった女の子だ。
女の子は笑って、「ありがとう」と言って自分の席に戻っていった。
満足そうに。

あ……？

んだよ……？

涙が、頬を伝っていた。

何でだろう？

解らなかった。

何で泣いているんだろう……？

解らない。

ああ、それでもいいか……。

俯きながら目を覆って、そう思う。

それでいい。それでもいい。

今は泣いておこう。

そう思う。

電車は進む。俺を乗せて。
出迎える人すら居ないであろう、まだ見ぬ街に向かって。
動いていない、と、
何もしていない、と、
役に立たない、と、
そう思っていた俺も、
動いていた。
ちゃんと。ちゃんと。
動いていなかった俺でも、

「ああ・・・、ちゃんと、進んでんだ・・・」

駅で降りた。

俺は何故か笑顔だった。

目は多分赤かった。

それでもやっぱり笑顔だった。

思ったとおり、駅に出迎えは居なかった。

それでもよかった。

ここから、またスタートだ。

俺は荷物を担ぎなおして、そんな事を考えた。

「あの・・・」

「え？」

声を掛けられた。後ろから。

俺に声を掛けたのは女の人だった。

大きな鞆を持って、俺と同じように赤く目を腫らしていた。

「あの・・・、病院って、どこだかご存知ですか？」

「ああ、それなら」

俺は予め調べておいたこの街の図面を思い出しながら、その場所を

説明した。

確か、駅から歩いて三分も掛からない場所にあったはずだった。

「ありがとうございます」

その人はふわり、という感じに笑った。

本当、そんな感じで。

ああ、この人かな、と思った。

あの自転車の男の見送りがかった人は、と。

全然根拠も何も無かったけど、そうだろう、と思った。

そうだったらいいな、と思った。

その人は俺に頭を一回下げて、病院に向かっていった。

俺は早速この街で人の役に立てた。

今度はこの街を、好きになれそうだ。そう思った。

六話目 銀河鉄道 ～乗客の話～ (後書き)

ラスト一話です。次で終わりです。
ともかく楽しんで頂ければ幸いです。

七話目 スノースマイル2

あれから、もう一度この季節が巡ってきた。
雪が、ちらほら舞っている。

ああ・・・、ホラ、雪降ったぞ・・・？

伝えたいのに、その相手は今居ない。

だから、僕は並木道を一人で歩く。

「君と出会えて、本当に良かった・・・」

誰に言うでもなく、空を見上げて呟いた。

あの時の乾いた空とは違う、綺麗な青空が広がっていた。
もうすぐ、季節は変わる。

もうひよっこりと、春が顔を出していた。

それなのに、あの子はもう居ない。

もうすぐ止むだろうけど、雪も降った。

あの時乾いていた空も、今では蒼く澄み渡っている。

それでも、喜びと一緒に分かち合いたい彼女は、居ない。

ポケットに手を突っ込みながら歩いて、ポケットの中に彼女の温もりを感じる。

否、感じるわけは無い。あれから時間は過ぎた。

今着ている服も、あの頃とは違う。

それでも、僕はポケットに彼女の温もりを感じていた。

僕の手だけが入っているポケットの中で、ギュッ、と拳を握る。

目頭が熱くなるのを感じて、僕は目を強く瞑った。

これから何度も、季節は巡る。

僕はその度に、きつと思いつから。

あの日、君としたキャッチボールを。

あの日、君と並んで歩いたこの道のことを。

あの日、君の手をポケットの中で握ったことを。

あの日、君が居る景色を必死で覚えようとしたことを。

あの日、君を後ろに乗せていたことを。

あの日、確かに温もりを背中に感じていたことを。

そして今日、今、確かに僕は君の事を覚えていることを。

僕には夢があった。

些細な夢だった。本当に。普通だったら、簡単に適うはずの夢だ。けど、それはもう叶わない。

“君とずっと一緒に”。

もう、叶わない。

それでも、忘れない。

あの日、君が僕の隣に居た事を

あの日、君が僕と一緒に生きていた事を

きつと、きつと僕は、忘れないから

七話目 スノースマイル2（後書き）

最終話です。

三日で完結、とか言ってたのに、三倍以上の日数を掛けてしまいました。

何は無くとも、楽しんで頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9743a/>

BUMP OF CHICKEN メドレー

2010年11月12日07時37分発行